

一次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

独学する心は、学問や読書にだけあるのではなく、おおよそ人が生きるために学ぶ行為の中では、いつも必要とされているものではないだろうか。例えば、私が去年知り合った大工さんは独学の権化（具体的に現れたもの）のような人だ。自分の家を改築したときに、この人に来てもらった。歳は当時六五歳だった。名前は高橋茂さん、大工としての腕もとびきりだが生きる姿もすばらしい。

高橋さんが子どもだった頃は集団シノウシヨクのゼンセイキ。この人は中学卒業後に埼玉へ出て、大工の親方に弟子入りをした。そこで一番つらかったのは、「自分が何をすればいいか、だれも言ってくれなかったこと」だったそうだ。作業現場に行っても、指示がない。親方の仕事を後から見てみると「仕事のじゃまだ」とか「ぼーっとしているな」などとどなる。ボウでなぐられたこともあったそうだ。働きに出て、何をしたらいいかわからないほどつらいことはない。中学を出て親元からはなれたばかりの子どもだから、さぞつらかっただろう。でも、現場にしばらく通っていくうちに、自分が何をすればいいのかが段々とわかってきた。そうすると、親方と自分の差というものがある。おのずと見えてくる。親方の腕から出るけずりくずを見て、びくつきする。「どうやってこんなグアイにけずれるんだらうか」と考える。夜、皆の仕事が終わる、後かたづけもすませてから、一人で鉋を手に取って不用な木材をけずってみる。見よう見まねだ。そうするうちに仕事でだんだんとおもしろくなってきたという。奉公に入ってから一年くらいでそうだった。たいした教育じゃないか。

ここで君たちに考えてもらいたいのは、なぜ、親方は高橋さんに何も教えなかったのか？ということである。もちろん、いじわるをしているのでも、技術をかくしているわけでもない。口で教えることで死んでしまう技が大工の技だからだ。言葉で教えられるものは、すぐに忘れてしまう。それはただの知識だから。自分の体を使って発見したものは忘れない。そういうものは知識じゃなく、身についた自分の技になっている。

人間の体は、手も足も一人ひとりちがう。大工が木をけずるにしても、そのときの感覚、高橋さんの言葉では「勘」は、人によって異なる。木と鉋と鉋、この三つの間にできる関係は、「○○人いたら○○とありあ。これを口先で教える方法は絶対にない。これは職人ならだれでも知っていることだろう。」
A 各々が独自に身につける必要がある。自分なりにあれこれと取り組んでみて、わかる以外にはない。それから大工というものは、自分のあつかう木がどう育つてきて、これからどういうふうに変化するのか、どう反って、どう縮むか、木を持っただけでじかに感じられるようになる。でないと、生きたいくつもの木をどう組み合わせたらいいかはわからない。

B 電気鉋しか使わない現代の大工さんが、もうそうした感覚を失っている。感覚なしでも、機械が全部やってくれるから。それから無垢（人間の手にふれられていないこと）の木をあつかうことがほとんどなくなった。工業製品の合板は、死んでいて、変化しない。部品として組み立てるだけだ。これじゃ、木を讀むなんて技が育つわけがない。鉋をかける技もなく、木を讀むことのできない大工は、高橋さんのような職人からすると大工とは言えない。建設会社の社員である。

C 、「これは大工の世界に限らない。近代イコウ、人間が自然を相手に身につけてきた大切な技はほとんど失われてきた。私たちは、機械の便利さになんて身ひとつの「勘」でしかみがかれない技を持ってなくなってきた。独学する心は、ここでも失われてしまった。西洋の近代とは、自然を科学の力でねじふせようとしてきた時代ではないか。むしろそんなことはできないのだが、できる気になってしまっている。

科学は、あらゆるものを数の関係に置きかえて、「(物に有用に働きかける)ことを目的にしている。つまり、自分の都合に合わせて、自然を利用するわけだ。だから、物にも自然にも、おのずと愛情や敬意を持たなくなる。口では持っているようなことも言うが、物とつき合う体も技も欠いているのだから、愛情は育ちようがない。

建築もそうで、工業生産品を組み立ててつくる建物は、全部数学的な関係をあてはめて考えられたものだ。それを考える人を建築士というのだが、建築士は「メソ」を引くだけで、木にも石にもじかにふれるということがない。ふれたって、そこから何かをつかむ技を持っていない。何でも数のうへの計算ですませる。この計算がどんなに高いビルを建てたかには関係ない。でも、そういうやり方に、人間が自然の中で、言いかえると天のもとで生きる知恵というものがあろうか。これがないと人類は大変なことになってしまふ。

これは、高橋さんに聞いた話だが、大工と建築士の間では、柱一本立てるのにもたびたび意見が食い違う。知識と計算で物事を考える人と、身ひとつの勘と技で仕事をする人とはそうなるだろう。それから、高橋さんはこんなことも言う。「仕事にはできることとできねえことがある。素人はそこそこがわからねえから困るんだ」と。できないことがあるのは、自然が与える物の性質にしたがっているからである。もし、できないことがなくなったら、仕事は成り立たなくなる。水のないプールでは泳げないようなものだ。建築士はそうは考えない。できないことは、そのうち科学技術の進歩で可能になる。できないことを放っておくのははじだと思っている。私たち素人もだいたいそういう考えでいる。これじゃ、人間に大事なことが、何もわからなくなるのではないか。

学問でもほんとうは同じである。考えられないことがあるということは、学問が可能になるための大切な条件である。我が身をはなれた空想はいくらでもできる。が、それは空想でしかない。学問はしっかりと対象を持たなくてはならない。その対象の性質にうまく、深く入りこまなくてはならない。身ひとつ、心ひとつで入りこむ。その中でできることがどんなにわずかなことか、ほんとうの学問で苦労した人は、みな知っている。社会に出て担う仕事も、多くはそうなのではないだろうか。ただ、科学技術の発展に目をうばわれて、たくさんの方がこの「くあたりまえのことを忘れてる」ように思う。

(前田英樹「独学する心」より 一部略)

問一 線部1～6のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 線部a「およそ」・b「おのずと」のことばの意味として適当なものを次のア～オから選び、それぞれ記号で答えなさい。(同じ記号は二度使えません)

ア 自然と イ おそろく ウ たいてい エ すべて オ 不思議と

問三 線部①「仕事でだんだんとおもしろくなってきた」とありますが、そのように変わっていく様子を次のようにまとめました。その文の(1)・(2)にあてはまることばを、それぞれ十字以内で考え、文を完成させなさい。(「」は字数に数えます。)

だれも(1) 作業現場であつたが、通い続けるうちに何をすればいいかわかり、(2) (こと)で、仕事のおもしろさがわかってきた。

問四 線部②「たいした教育」とありますが、親方はどのようなことをしたのですか。適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分の仕事をそばで見えるように指示した。 イ 仕事ができないことをひどくしかりつけた。 ウ 仕事に関しては教育も何もしていない。 エ 自分の姿を見せて仕事をおぼえさせた。

問五 線部③「口で教える……大工の技だからだ」とありますが、ここでいう「大工の技」とはどのような技ですか。本文のことばを使って二十字以内で説明しなさい。(「」は字数に数えます。)

問六 ……線部「二〇〇人いたら一〇〇とありあ」について、次の1・2の問いに答えなさい。

1 「二〇〇人いたら一〇〇とありあ」と同じような意味になるように、解答らんの□に漢数字をあてはめ、四字熟語を完成させなさい。

2 解答らんの□に漢数字をあてはめ、四字熟語をそれぞれ完成させなさい。

問七 A C にあてはまるものを次のア～オから選び、それぞれ記号で答えなさい。(同じ記号は二度使えません。)

A そこで イ ところが ウ だから エ つまり オ もちろん

問八 線部④「生きたいくつもの木」とありますが、ここでいう「生きた木」と対照的に用いられていることばを本文から七字でさがし、書きぬきなさい。(「」は字数に数えます。)

問九 線部⑤「木を讀む」とありますが、具体的にどうすることですか。それがわかるところを本文から五十字以内でさがし、解答らんに続くように、最初と最後のそれぞれ五字を書きぬきなさい。(「」は字数に数えます。)

問十 線部⑥「自然を科学の力でねじふせようとしてきた」とありますが、そのようにしてきたのはなぜですか。適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

A 人間は自然を支配できるものととらえ、自分たちの都合のよいように変えられようと考えたから。 イ 人間は自然を支配できないものととらえ、機械にたよって自分たちに利益をもたらそうと考えたから。 ウ 人間は自然を大して役に立たないものととらえ、自分たちの生活には必要ないと考えたから。

問十一 線部⑦「この計算が……知っている」とありますが、これにはどのような意味がふくまれていますか。適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

A 自然をかえりみずに便利な生活を求めたことを反省するという意味。 イ 自然をこわす一方で生活を豊かにする科学技術への敬意を持つという意味。 ウ 生活をおびやかすまで発展し続ける科学技術の見直しをするという意味。 エ 科学技術の力によって便利な生活を送っていることを認めるという意味。

問十二 線部⑧・⑨の「素人」は指し示す対象が異なります。それぞれ具体的に何を指しますか。適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

A 科学者 イ 大工 ウ 建築士 エ 作業員 オ 一般人

問十三 ―線部⑩「これじゃ、……なるのではないか」について、次の1・2の問いに答えなさい。

1 「これ」は、どのようなことを指しますか。適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 科学技術に対する自信から、その進歩でどんなことも可能になると考えているということ。

イ 科学技術に対する信頼から、その進歩で人間がする仕事はなくなると考えているということ。

ウ 科学技術に対する期待から、その進歩で自然が与える物の性質が改良されると考えているということ。

エ 科学技術に対する敬意から、その進歩は放つておいても加速すると考えているということ。

2 「人間に大事なことを」を十字で表しているところを本文からさがし、書きぬきなさい。() 「」は字数に数えます。

問十四 ―線部⑪「このくあたりまえのこと」とは、どのようなことですか。適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 対象を見きわめてそれに没頭すること、人間の力で実現できることを知り、科学技術の暴走をくい止めること。

イ 対象をとらえてその性質に入りこむことで、人間の力には限界があり、できることは少ししかないを理解すること。

ウ 対象となるものの特性をとらえることで、それを利用する人間の力を強化し、理想を実現しようとする。

エ 対象となるものの性質を変えることで、人間の力が認められ、科学技術だけに注目することがなくなること。

問十五 本文で述べられているものとして適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 職人の持つ「勘」は、知識をつみあげることで、弟子たちに伝えられるようになる。

イ 機械の便利さになれると効率の良さを求めてしまい、人と人とのつながりはなくなってしまう。

ウ たとえ失敗しても、自分で工夫を重ねて身につけた技術や感覚は失われることはない。

エ 人類の今後を考えると人間は機械を捨てて、自然のもとで生きる生活を取りもどす必要がある。

二次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

朝食ができてしきつばなしのレールの脇で食べはじめると、息子が、
「ねえ。パパ。
あの写真はパパが赤ちゃんだったパパ、なんだよねえ」と言い出した。

「あの写真」というのは二日前におじいちゃんとおばあちゃんの家、つまり僕の実家に行ったときにおばあちゃんに見せてもらったムカシのアルバムの白黒の写真のこと、その写真のなかでは、パパである僕はまだ一歳かそこらで四つんばいで、その四つんばいの僕と並んで

① 兄弟のような大きな猫が写っていた。
息子はいま五歳で、パパにも子ども時代があり、どんな大人にも赤ちゃんだった時代があるということ、だいたい理解できているけれど、実際に赤ちゃんの写真を、それも見えない白黒で見せられて「パパだよ」と言われてみると、自分よりずっと小さい赤んぼうがパパであることがどうしても納得できないという現実感を欠いているらしくて、きのうも二回、「あの赤ちゃんは赤ちゃんだったパパなんだよね」と言

った。
息子の質問というが、念おしに、僕は「そうだよ」と答えた。息子はバターをぬったトーストを食べやすくするために二つに折ってスープにひたしながら、とても難しい顔をしていた。
「ねえ。パパ。
猫はどうしたの？」
「猫かあ。猫はもう死んじゃったな」
「えっ！ 死んじゃったの。」
「ヒョエーッ！」
息子は目を丸くして、トーストを持っていない方の左手を高く上げて、大げさにおどろいて見せた。この反応を見れば、「死ぬ」ということが、息子にとって正しく重大なこととして理解されていないことがわかる。

「じゃあ、赤ちゃんも死んじゃったんだ」
「赤ちゃんはパパになったんだよ」
僕は一瞬吹き出しそうになったが、おさえてとりあえずそう言った。吹き出したりしたら、きずつくかもしれない。吹き出すというか笑うとかも、泣くとかおこるとかと同じようになれば案外コントロールできるものなのだ。

こういうやりとりをしていると息子はたいてい予想外のことを言い出すことになっているから、こつちもそれなりに笑わないジューンビまで
はできていたのだけれど、具体的に何を言い出すかまでは予想がつかない、だから僕の答えは「赤ちゃんはパパになった」なんて、じつに即物的
な（物に合わせて考えるさま）ものになってしまった。

「赤ちゃんだったの？」

いつまでもトーストをスープにひたしているとベチャベチャになってしまふのに気がついて、息子はゼリーをスプーンでつまみ出してトーストの
ひたしたところを口に入れた。

② クイちゃん「僕は言った」

息子の名前は圭太だけれど、カタコトをしゃべりはじめた頃、自分のことを「クイちゃん」と呼んで、それ以来まわりの全員が「クイちゃん」と呼ぶようになった。

さつきも言ったように息子は、どんな大人にも赤ちゃんだった時代があることも、パパにも赤ちゃんだった時代があったことも一応は理解
できているのだけれど、その表現がかわって、

③ A「すべての赤ちゃんが大人になる」

となると、ちよつとわからなくなるといふか、そのセンテンス（文）と現実との対応が難しくなる。そこからさらに進んで、具体的に一枚の
写真を見せられて、

④ B「そこに写っている赤ちゃんがパパだ」

というのは、もつと現実との対応が難しくなってくる。

おばあちゃんはクイちゃんから見ると「おばあちゃん」だけれど、おばあちゃんから見るとクイちゃんは何になるか、という視点や立場の転換
がわからないのと同じことだ。

⑤ C「クイちゃん。クイちゃんだって赤ちゃんだっただろう」

息子は今度はトーストの残りの三分の一をスープにひたしながらこつちを見て、だまつてうなずいた。

⑥ D「それで、クイちゃんだって、大きくなって、学校に行つて、大人になって、結婚してパパになるだろう？」

これにも息子はこつちを見たままだまつてうなずいた。「結婚する」とか「パパになる」とか、いまだきそんなことあたり前とも言えないの
で、できれば言いたくないが仕方ない。こういうことを口にするたび、子どもは成長のカタイで、不用意に、ぼう大な量の社会性や規範をお
しつけられていると思う。それでも僕は行きがかり上そう言い、

「だから、パパもクイちゃんと同じように、赤ちゃんで生まれて、大きくなって学校に行つて、大人になってママと結婚してクイちゃんの
パパになったんだ」
と言った。

⑦ 息子はわかつたような顔をしてうなずいて聞いていて、それから、
「じゃあ、猫はどうして死んじゃったの？」
と言った。

「猫かあ。」

「猫はねえ、あんまりいっぱい生きていないんだよ」

「おもしろいね」

息子は少しもおもしろそうではなく、いかに猫に落ちないという顔で下を向いて、スープにひたしたトーストの残り三分の一を食べた。「お
もしろいね」とは「変だね」とか「⑧」の意味だ。

そういうえば、息子の質問は「猫はどうしたの？」ではじまつていた。僕は赤ちゃんの方に気をとられてしまったが、息子の疑問は「赤ちゃんが
パパになったのなら、猫は何になつたのか」ということではないかということに、おくれればせながら思いあたった。

その疑問に対して、出てきた答えは「死んじゃった」で、そこからさきさき答えらしい答えが返つてこなかったというわけだった。

しかし僕はそれでいいと思つた。「死」というのは大人だつてうまう考えることができていない何物かなのだから、他の疑問のようにきちんと
とした答えが出てくるわけではない。それでもとちやんとした答えを聞くとうしてもそれ以上の答えは出てこない。いまは息子
子は「死んじゃった」と聞いて、「ヒョエーッ！」と明るくおどろいているだけだが、このようにはつきりしない腑に落ちないやりとりをくり
返すことで、少しずつ「答えられない」ということの持つ意味を知っていく。「死」とはそういう風にしか知っていくことのできないものなん
じゃないかと思う。

息子は腑に落ちない顔のまま、スープの中からブロッコリーを指でつまみ出して口に入れた。

問一 線部1～5のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 ①にあてはまるものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア よもや イ たぶん ウ おそらく エ まるで

問三 線部②「きのうも二回、『あの赤ちゃんは赤ちゃんだったパパなんだよね』と言った」とありますが、「僕（父親）」は息子が同じことをくり返したのはなぜだと考えていますか。解答らんに続くように、四十文字以内で考えて答えなさい。

(、 、) 「」は字数に数えます。

問四 線部③「息子の質問というか、念おしに」とありますが、息子が「念おし」をしたのはなぜですか。適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 父親が言ったことをもう一度確認かくんするため。 イ 自分の正しさを主張するため。

ウ 自分の考えに対する同意がほしいため。 エ 父親がうそをついていないか試なすため。

問五 線部④「きずつくかもしれない」とありますが、「僕（父親）」がこう感じたのはなぜですか。その理由を解答らんに続くように、二十文字以内で考えて答えなさい。(、 、) 「」は字数に数えます。

問六 線部⑤の「クイちゃん」の後に直接続くべき会話を本文の[A]～[D]から一つ選び、記号で答えなさい。

問七 線部⑥「現実との対応が難しくなってくる」について、次の1・2の問いに答えなさい。

1 「現実との対応が難し(い)」とはどのようなことですか。適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア ものことは自分の視点を変えても変化しないということ。

イ ものごとを見る時は様々な視点から見るべきだということ。

ウ ものごとを実際の立場からはなれては考えにくいということ。

エ ものごとが自分だけの立場で成り立っていると考えること。

2 「現実との対応が難し(い)」ことを、次のように具体的に説明しました。その文の(1)・(2)にあてはまることばをそれぞれ考え、文を完成させなさい。

クイちゃんにとって、おばあちゃんから見ると自分は(1)になると考えることが難しいのと同じように、

クイちゃんから見てもパパは(2)であったとは考えにくいということ。

問八 線部a「行きがかり上」、b「瞬に落ちない」のことばの意味として適当なものを次のア～エから一つ選び、それぞれ記号で答えなさい。

a ア 話のついでに イ 話をきりあげて

エ 話を交えられずに

b ア 落ち着かない イ がまんならない

ウ 仕方がない

エ 納得なつできない

問九 線部⑦「息子はわかったような顔をしてずつとうなずいて聞いていて」とありますが、このときの息子の状態を説明したものとして適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 父親の言うことはわかったつもりでいるが理解できていない状態。

イ 父親の言うことはひとつも聞きのがせないと真剣しんけんにきいている状態。

ウ 他のことを考えていて父親の話はどうでもよいと思っっているうわの空の状態。

エ もうよくわかっていてあるが父親の話を素直すなに聞いている状態。

問十 ⑧にあてはまるものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 笑えるね

イ 不思議だね

ウ 興味深いね

エ かわいそうだね

問十一 線部⑨「僕はそれでいいと思った」とありますが、このときの「僕（父親）」の心情を説明したものとして適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 質問に対してすじちがいの答えをしてしまっても、それはおかしいと相手が判断できればさしかえはないと思っている。

イ いくら待ってもきちんと答えてもらえない問題に対しては、それを自分ひとりでなんとかしなくてはならないと思っている。

ウ 大人がうまく答えをだせない問題は、子どもにもわかるはずがないので、それを説明する必要があると思っっている。

エ 答えがだせない問題があることを知り、それについては人とのやりとりの中で自分で考え、深めていくものだと思っっている。

問十二 この文章の特徴として適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 会話文から両親や祖母、子どものそれぞれの性格を読みとることができるようにになっている。

イ 過去の会話を思い出す場面は、父親と子どもの両方の視点からえがかれている。

ウ 何気ない日常の会話の中に発見があり、子どもの成長を見守る父親の様子がえがかれている。

エ 流れのよい親子の会話がくり返される中で、子どもの疑問がしだいに明らかになっている。

受 驗 番 号
得 点